江戸川乱歩全集 3

孤島の鬼

講談社

江戸川乱歩全集 3

孤島の鬼

昭和四十四年六月十日　第一刷発行
昭和四十七年四月十五日　第七刷発行

著　者　江戸川乱歩
装幀者　伊藤憲治
挿　絵　永田力
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目十二番二十一　郵便番号一一二
電話　東京(945)一一一一―大代表　振替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社大光堂
七九〇円

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。　© Ryū Hirai　1969

0393-225839-2253（1）　（文2）

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

木馬は廻る　9
陰獣　21
芋虫　85
孤島の鬼　101
蜘蛛男　269
乱歩の作品、乱歩さんの思い出　福永武彦　422
作品解題　中島河太郎　426

孤島の鬼

木馬は廻る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ここはお国を何百里、離れて遠き満洲の……」

ガラガラ、ゴットン、ガラガラ、ゴットン、廻転木馬は廻るのだ。

今年五十幾歳の格二郎は、好きからなったラッパ吹きで、昔はそれでも、郷里の町の映画館の花形音楽師だったのが、やがてはやり出した管絃楽というものにけおされて、「ここはお国」や「風と波と」では、いっこう雇い手がなく、ついには披露目屋の徒歩楽隊となり下がって、十幾年の長い年月を、荒い浮世の波風に洗われながら、日にち毎日、道行く人の嘲笑の的となって、でも、好きなラッパが離されず、たとえ離そうと思ったところで、ほかにたつきの道とてはなく、一つは好きの道、一つは仕様ことなしの、楽隊暮らしをつづけているのだった。

それが、去年の末、披露目屋からさし向けられて、この木馬館へやってきたのが縁となり、今では常雇いの形で、ガラガラ、ゴットン、ガラガラ、ゴットン、廻る木馬のまん中の、一段高い台の上で、台には紅白の幔幕を張りめぐらし、彼らの頭の上からは四方に万国旗がのびている、そのけばけばしい装飾台の上で、金モールの制服に、赤ラシャの楽隊帽、朝から晩まで、五分ごとに、監督さんの合図の笛がピリピリと鳴り響くごとに、「ここはお国を何百里、離れて遠き満洲の……」と、彼の自慢のラッパをば、声はり上げて吹きならすのだ。

世の中には、妙な商売もあったものだな。一年三百六十五日、手垢で光った十三匹の木馬と、クッションの利かなくなった五台の自動車と、三台の三輪車と、背広服の監督さんと、二人の女切符切りと、それが、廻り舞台のような板の台の上でうまずたゆまず廻っている。すると、嬢っちゃんや坊っちゃんが、お父さんやお母さんの手を引っぱって、おとなは自動車、子供は木馬、赤ちゃんは三輪車、そして、五分間のピクニックをば、なんとまあ楽しそうに乗り廻していることか。藪入りの小僧さん、学校帰りの腕白、中には色気ざかりの若い衆までが「ここはお国を何百里」と、喜び勇んでお馬の背中で躍るのだ。

すると、それを見ているラッパ吹きも、太鼓叩きも、よくもまあ、あんな仏頂面がしていられたものだと、よそ目には滑稽にさえ見えているのだけれど、彼らとしては、そうして思い切り頬をふくらしてラッパを吹きながら、撥を上げて太鼓を叩きながら、いつの間にやら、お客様といっしょになって、木馬の首を振る通りに楽隊を合わせ、無我夢中でメリイ、メリイ、ゴー、ラウンドと、彼らの心も廻るのだ。廻れ、廻れ、時計の針のように、絶えまもなく、お前が廻っているあいだは、貧乏のことも、古い女房のことも、鼻たれ小僧の泣き声も、南京米のお弁当のことも、梅干一つのお菜のことも、一切がっさい忘れている。この

世は楽しい木馬の世界だ。そうしてきょうも暮れるのだ。あすも、あさっても暮れるのだ。

毎朝六時がうつと、長屋の共同水道で顔を洗って、ポンポンと、よく響く柏手で、今日様を礼拝して、今年十二歳の、学校行きの姉娘が、まだ台所でごてごてしている時分に、格二郎は、古女房が作ってくれた弁当箱をさげて、いそいそと木馬館へ出勤する。姉娘がお小遣をねだったり、癇持ちの六歳の弟息子が泣きわめいたり、なんということだ、彼にはその下にまだ三歳の小せがれさえあって、それが古女房の背中で鼻をならしたり、そこへもってきて、当の古女房までが、頼母子講の月掛けが払えないといってはヒステリィを起こしたり……そういうもので充たされた、裏長屋の九尺二間をのがれて、木馬館の別天地へ出勤することは、彼にはどんなにか楽しいものであったのだ。そして、その上に、あの青いペンキ塗りの、バラック建ての木馬館には、「ここはお国を何百里」と日ねもす廻る木馬のほかに、吹きなれたラッパのほかに、もう一つ、彼を慰めるものが待っていさえしたのである。

木馬館では、入口に切符売場がなくて、お客様は、勝手に木馬に乗ればよいのだ。そして半分ほども木馬や自動車がふさがってしまうと、監督さんが笛を吹く、ドンガラガッガと木馬が廻る、すると二人の青い布の洋服みたいなものを着た女たちが、肩から車掌のような鞄をさげて、お客様のあいだを廻り歩き、お金と引換えに切符を切って渡すのだ。その女車掌の一方は、もう三十をだいぶすぎた、彼の仲間の太鼓叩きの女房で、おさんどんが洋服を着た恰好なのだが、もう一方のは十八歳の小娘で、むろん木馬館へ雇われるほどの娘だから、とてもカフェの女給のように美しくはないけれど、でも女の十八といえば、やっぱり、どことなく人を惹きつけるところがあるものだ。青い木綿の洋服が、しっくり身について、それの小皺の一つ一つにさえ豊かな肉体のうねりが、なまめかしく現われているのだし、青春の肌の薫りが、木綿を通してムッと男の鼻をくすぐるのだし、そして、器量はといえば、美しくはないけれど、どことなくいとしげで、時々は、おとなの客が切符を買いながら、からかってみることもあり、そんな場合には、娘の方でも、ガクンガクンと首を振る、木馬のたてがみに手をかけて、いくらか嬉しそうにからかわれていたのである。名はお冬といって、それが格二郎の、日ごとの出勤を楽しくさせたところの、実をいえば最も主要な原因であったのだ。

としがひどく違っている上に、彼の方にはチャンとした女房があり、三人の子供までできている。それを思えば、「色恋」の沙汰はあまりに恥かしく、事実また、そのような感情からではなかったのかもしれないけれど、格二郎は、毎朝、わずらわしい家庭をのがれて、木馬館に出勤して、お冬の顔を一と眼見ると、妙に気持がはればれしくなり、口を利き合えば、青年のように胸が躍って、年にも似合わず臆病になって、それゆえに一そう嬉しく、もし彼女が欠勤でもすれば、どんなに意気込んでラッパを吹いて

も、何かこう気が抜けたようで、あの賑やかな木馬館が、妙にうそ寒く物淋しく思われるのであった。

どちらかといえばみすぼらしい、貧乏娘のお冬を、彼がそんなふうに思うようになったのは、一つは己れの年齢を顧みて、そのみすぼらしいところが、かえって気安く、ふさわしく感じられもしたのであろうが、又一つには、偶然にも、彼とお冬とが同じ方角に家を持っていて、館がはねて帰る時には、いつも道連れになり、口を利き合う機会が多く、お冬の方でも、なついてくれれば、彼の方でも、そんな小娘と仲よくすることを、そう不自然に感じなくてすむというわけであった。

「じゃあ、またあしたね」

そして、ある四つ辻で別れるときには、お冬はきまったように、少し首をかしげて、多少甘ったるい口調で、このような挨拶をしたのである。

「ああ、あしたね」

すると格二郎もちょっと子供になって、「あばよ、しばよ」というようなわけで、弁当箱をガチャガチャいわせて、手をふりながら挨拶するのだ。そして、お冬のうしろ姿を、それが決して美しいわけではないのだが、むしろみすぼらしくさえあるのだが、眺め眺め、かすかに甘い気持になるのであった。

お冬の家の貧乏も、彼の家のと、大差のないことは、彼女が館から帰るときに、例の青木綿の洋服をぬいで、着換えをする着物からでも、充分に想像することができるのだし、また彼と道づれになって、露店の前などを通るとき、彼女が眼を光らせて、さも欲しそうに覗いている装身具の類を見ても、「あれ、いいわねえ」などと、往来の町家の娘たちの身なりを羨望する言葉を聞いても、可哀そうに彼女のお里はすぐに知れてしまうのであった。

だから、格二郎にとって、彼女の歓心を買うことは、彼の軽い財布をもってしても、ある程度まではむずかしいわけでもないのだ。一本の花かんざし、一杯のおしるこ、そんなものにでも、彼女は充分、彼のために可憐な笑顔を見せてくれるのであった。

「これ、だめでしょ」彼女はあるとき、彼女の肩にかかっている流行おくれのショールを、指先でもてあそびながら言ったものである。だから、むろんそれはもう寒くなりはじめた頃なのだが、「おととしのですもの、みっともないわね。あたしあんなのを買うんだわ。ね、あれいいでしょ。あれがことしのはやりなのよ」彼女はそういって、ある洋品店の、ショウインドウの中の立派なのではなくて、軒の下に下がっている値の安い方を指さしながら、「アーア、早く月給日がこないかな」とため息をついたものである。

なるほど、これが今年の流行だな。格二郎ははじめてそれに気がついて、お冬の身にしては、さぞ欲しいことであろう。もし安いものなら財布をはたいて買ってやってもいい、そうすれば彼女はまあどんな顔をして喜ぶだろう。と軒下へ近づいて、正札を見たのだが、金七円何十銭というのに、とても彼の手に合わないことを悟ると同時に、彼自身

の十二歳の娘のことなどが思い出されて、今さらながら、この世が淋しくなるのであった。

そのころから、彼女はショールのことを口にせぬ日がないほどに、それを彼女自身のものにするのを、つまり月給を貰う日を待ちかねていたものだ。ところが、それにもかかわらず、さて月給日がきて二十幾円かの袋を手にして、帰りみちで買うのかと思っていると、そうではなくて、彼女の収入は、一度全部母親に手渡さなければならないらしく、そのまま例の四つ辻で、彼と別れたのだが、それからきょうは新らしいショールをしてくるか、あすは、かけてくるかと、格二郎にしても、わがことのように待っていたのだけれど、いっこうその様子がなく、やがて半月ほどにもなるのに、妙なことには、彼女はその後少しもショールのことを口にしなくなり、あきらめ果てたかのように、例の流行おくれの品を肩にかけて、でも、しょっちゅう、つつましやかな笑顔を忘れないで、木馬館への通勤を怠らぬのであった。

その可憐な様子を見ると、格二郎は、彼自身の貧乏については嘗つて抱いたこともない、ある憤りのようなものを感じぬわけにはいかなかった。僅か七円何十銭のおあしが、そうかといって、彼にもままにならぬことを思うと、一そうむしゃくしゃしないではいられなかった。

「やけに、鳴らすね」

彼の隣に席をしめた若い太鼓叩きが、ニヤニヤしながら彼の顔を見たほども、彼は、めちゃくちゃにラッパを吹いてみた。

「どうにでもなれ」というやけくそな気持だった。いつもは、クラリネットに合わせて、それが節を変えるまでは、同じ唱歌を吹いていたのだが、その規則を破って、彼のラッパの方からドシドシ節を変えて行った。

「金比羅舟々、おいてに帆かけて、しゅらしゅしゅしゅ」

と彼は首をふりふり、吹き立てた。

「やっこさん。どうかしてるぜ」

ほかの三人の楽師たちが、思わず眼を見合わせて、この老ラッパ手の狂躁を、いぶかしがったほどである。

それは、ただ一枚のショールの問題にはとどまらなかった。日頃のあらゆる憤怒が、ヒステリィの女房のこと、やくざな子供たちのこと、貧乏のこと、老後の不安のこと、もはや帰らぬ青春のこと、それらが、金比羅舟々の節廻しをもって、やけにラッパを鳴らすのであった。

そして、その晩もまた、公園をさまよう若者たちが「木馬館のラッパが、ばかによく響くではないか、あのラッパ吹きめ、きっと嬉しいことでもあるんだよ」と笑いかわすほども、それゆえに、格二郎は、彼とお冬との歎きをこめて、いやいや、そればかりではないのだ、この世のありとあらゆる歎きの数々を一管のラッパに託して、公園の隅から隅まで響けとばかり、吹き鳴らしていたのである。

無神経の木馬どもは、相変らず時計の針のように、格二郎たちを心棒にして、絶え間もなく廻っていた。それに乗るお客たちも、それを取りまく見物たちも、彼らもまた、

あの胸の底には、数々の苦労を秘めているのであろうか。でも、上辺はさも楽しそうに、木馬と一緒に首をふり、楽隊の調子に合わせて足を踏み、「風と波とに送られて……」と、しばし浮世の波風を、忘れ果てたさまである。

だが、その晩は、このなんの変化もない、子供と酔っぱらいのお伽の国に、というよりは老ラッパ手格二郎の心の中に、少しばかりの風波をもたらすものがあったのである。

あれは、公園雑沓の最高潮に達する、夜の八時から九時のあいだであったかしら。そのころは木馬を取りまく見物も、大げさにいえば黒山のようで、そんなときに限って、生酔いの職人などが、木馬の上で妙な恰好をしてみせて、見物のあいだになだれのような笑い声が起こるのだが、そのどよめきをかき分けて、決して生酔いではない、一人の若者が、ちょうど止まった木馬台の上へヒョイと飛びのったものである。

たとえ、その若者の顔が少しばかり青ざめていようと、そぶりがそわそわしていようと、雑沓の中で、だれ気づく者もなかったが、ただ一人、装飾台の上の格二郎だけは、若者の乗った木馬がちょうど彼の眼の前にあったのと、乗るがいなや、待ちかねたように、お冬がそこへ駈けつけて、切符を切ったのとで、つまり半ばねたみ心から、若者の一挙一動を、ラッパを吹きながら正面を切った、その眼界の及ぶ限り、いわば見張っていたのである。どうしたわけか切符を切って、もう用事はすんだはずなのに、お冬は若者のそばから立ち去らず、そのすぐ前の自動車のもたれに手をかけて、思わせぶりにからだをくねらせて、じっとしているのが、彼にしては、一そう気にかかりもしたのであろうか。

が、その彼の見張りが決してむだでなかったことには、やがて木馬が二た廻りもしないあいだに、木馬の上で、妙な恰好で片方の手をふところに入れていた若者が、その手をスルスルと抜き出して、眼は何食わぬ顔でそとの方を見ながら、前に立っているお冬の洋服の、お尻のポケットへ、何か白いものを、それが格二郎には、確かに封筒だと思われたのだが、手早くおし込んで、元の姿勢に帰ると、ホッと安心のため息を洩らしたように見えたのだ。

「つけ文かな」

ハッと息を呑んで、ラッパを休んで、格二郎の眼は、お冬のお尻へ、そこのポケットから封筒らしいものの端が、糸のように見えているのだが、それに釘づけにされた形であった。もし彼が、以前のように冷静であったなら、その若者の、顔は綺麗だが、いやに落ちつきのない眼の光だとか、異様にそわそわした様子だとか、それから又、見物の群集にまじって、若者の方を意味ありげに睨んでいる、顔なじみの刑事の姿などに気づいたでもあろうけれど、彼の心はもっとほかの物で充たされていたものだから、それどころではなく、ただもうねたましさと、いい知れぬ淋しさで、胸が一ぱいなのだ。だから若者のつもりでは、刑事の眼をくらまそうとして、さも平気らしく、そばのお冬に声をかけてみたり、からかったりしているのが、格二郎には

一層腹立たしくて、悲しくて、それに又、あのお冬めいい気になって、いくらか嬉しそうにさえして、からかわれている様子はない。ああ、おれは、どこに取柄があってあんな恥知らずの、貧乏娘と仲よしになったのだろう。ばかめ、ばかめ、お前は、あのすべために、もしできれば、七円何十銭のシュールを、買ってやろうとさえしたではないか。ええ、どいつもこいつも、くたばってしまえ。

「赤い夕日に照らされて、友は野末の石の下」

そして、彼のラッパはますます威勢よく、ますます快活に鳴り渡るのである。

さて、しばらくして、ふと見ると、もう若者はどこへ行ったか影もなく、お冬はほかの客のそばに立って、なにげなく、彼女の勤めの切符切りにいそしんでいる。そしてそのお尻のポケットには、やっぱり糸のような封筒の端が見えているのだ。彼女はつけ文されたことなど少しも知らないでいるらしい。それを見ると、格二郎は又しても、未練がましく、やっぱり無邪気に見える彼女の様子がいとしくて、あの綺麗な若者と競争をして、打ち勝つ自信などは毛頭ないのだけれど、できることなら、せめて一日でも二日でも、彼女との間柄を、今まで通り混り気のないものにしておきたいと思うのである。

もしお冬がつけ文を読んだなら、そこには、どうせ歯の浮くような殺し文句が並べてあるのだろうが、世間知らずの彼女にしては、おそらく生まれてはじめての恋文であろうし、それに相手があの若者であってみれば（その時分ほかに若い男のお客なぞはなく、ほとんど子供と女ばかりだったので、つけ文の主は立どころにわかるはずだ）、どんなにか胸躍らせて、甘い気持になることであろう、それからは、定めし物思い勝ちになって、彼とも以前のようには口を利いてもくれなかろう。ああ、そうだ、いっそのこと、折を見て、彼女があのつけ文を読まない先に、そっとポケットから引き抜いて、破り捨ててしまおうかしら。むろん、そのような姑息な手段で、若い男女のあいだを裂き得ようとも思わぬけれど、でも、たった今宵一よさでも、これを名残りに、元のままの清い彼女と言葉をかわしておきたかった。

それから、やがて十時頃でもあったろうか。映画館がひけたかして、一としきり館の前の人通りが賑やかになったあとは、一時にひっそりとしてしまって、見物たちも公園生え抜きのチンピラどものほかは、たいてい帰ってしまい、お客様も二、三人きたかと思うと、あとが途絶えるようになった。そうなると、館員たちは帰りを急いで、中には、そっと板囲いの中の洗面所へ、帰り支度の手を洗いにはいったりするのである。格二郎も、お客の隙を見て、楽隊台を降りて、別に手を洗うつもりはなかったけれど、お冬の姿が見えぬので、もしや洗面所ではないかと、その板囲いの中にはいってみた。すると、偶然にも、ちょうどお冬が洗面台に向こうむきになって、一所懸命顔を洗っている、そのムックリとふくらんだお尻のところに、さいぜんのつけ文が半分ばかりもはみ出して、今にも落ちそうに見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.